

平成 30 年度学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

創始者の建学精神である「適切な教育を受けることによって、人生の幸福をつかむことができる」をもとに、めまぐるしく変革している社会で、子どもたちが豊かな人間性と社会性を育み、自立と社会参加及び貢献ができるよう、一人ひとりに応じた教育実践ができる学校をめざします。

- 1 地域と協感し、より安全で安心して学ぶことができる学校
- 2 家庭と共感し、子どもたちの夢がかなえられる学校
- 3 地域の学校園への橋感となり、様々なニーズに対し適切に支援できる学校

2 中期的目標

- 1 安全で安心して学べる学校づくりを進める。
 - (1) 関係機関等と連携し安全に対する意識変革を行い、子どもが危機に対し自ら回避できる能力を育む。
 - (2) 安全な社会づくりに貢献できるよう、ボランティア活動等に取り組み、様々な対応力を育む。
- 2 教職員が必要な知識の習得と技能の向上を図り、個々の教育的ニーズに対応する。
 - (1) 「個別の教育支援計画」等の一層の活用を図るとともに、一貫したキャリア教育を行い、適切に進路選択に取り組む。
 - (2) 多様な課題について研究し専門性の向上を図ることで、子どもたちが変革する社会で生き抜く力を育む。
- 3 地域の学校園とつながりを深め、センター的機能を充実する。
 - (1) 地域の学校園からの聴覚障がいに関する多様な相談に対し、適切な支援を行う。
 - (2) 地域の学校園等と連携し、在籍する児童生徒の指導方法及び就学前の子どもへの支援の充実を図る。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 30 年 12 月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>保護者の回収率は 68%。児童・生徒からの回収率は 52%。</p> <p>【学習指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒が「学校に行くのが楽しい」の問いに対し満足度が 78%、「お子さんが学校へ行くのを楽しみにしている」の問いは保護者の満足度は 82%。昨年度比較でも概ね同じ数値。 ・児童・生徒が「先生は私たちのことを大切にしている」の問いに対し満足度は 75%。保護者の「お子さんは、授業が分かりやすく楽しいと言っている」という問いは満足度が 60%であり、昨年度より 10%下回っている。ただし、選択肢 3：そう思うところもあると回答したのが 27%あることから、一概に授業の充実不足が大きな起因でないことが考えられる。 ・保護者が学校行事に参加したことがあるとの回答 93%で、教育活動に興味・関心が非常に高いことが示されている。 <p>【進路指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の「将来の進路や生き方について考える機会がある」の問いの満足度は 62%（前年度同数）と、保護者の「学校は、将来の進路等について適切な指導を行っている」の問いの満足度も 62%（前年度 67%）と。情報提供について努力しているかという問いは 61%（前年度 80%）となっており、昨年度よりも 20%下回っている。様々な方面での情報発信不足が否めなく、より充実した進路指導を行う方策を早急に検討する必要がある。 <p>【生徒指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の「担任の先生以外にも相談できる先生がいる。」という問いの満足度は 53%で昨年度と同じ。 ・子どもたちに生命の大切さ等を守る態度を養おうとしているかの問いは満足度が 75%。昨年度比約 10%減少し SPS 認証後の取組が一層必要であると痛切に感じた数値である。 ・先生の手話等がわかりやすいかの問いの満足度は 79%。昨年度同数値であり、校内手話講習会の継続実施の必要性を感じている。 <p>【働き方改革】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談しやすい体制については 60%となっており、今後も引き続き、相談できる組織を構築する必要がある。 	<p>第 1 回（6 月 14 日）【学校経営計画について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SPS 認証を受け、より安全な学校をめざし、防災や防犯に取り組んでほしい。 ・学習指導要領改訂に示されている「主体的・対話的な学び」について、研究授業等で振り返り、一貫教育を目指して取り組んでほしい。 ・本校の自立活動プログラムやキャリア教育プログラムなど、独自のカリキュラムを活用すること。キャリア教育を意識した、検定や資格を受検させる取り組みをより推進すること。 ・地域支援では、高等学校における障がい理解の取り組みも広げていけるよう支援を行うこと。 <p>第 2 回（10 月 29 日）【学校経営計画（中間評価）について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人工内耳が増え地域校に通う子どもが増えているが、聴覚支援学校の存在意義はあると考える。人工内耳を装着していても、きこえにくいことで孤立化し、心身のバランスを崩す子どもがいることを多くの人に理解してもらいたい。 ・手話と日本語、きこえる世界ときこえない世界等お互いに認め合い、わかりあえる社会になる必要があり、聴覚支援学校は、きこえにくい人にとって、ポート（港）であると思う。社会に出て、何か困った時に相談できる場所（港）。また、子どもを守るという意味のフォート（要塞）でもある。聴覚支援学校はこれまでも地域支援も行ってきた。地域校等とパイプをもち、「困ったら聴覚支援学校へ相談に」というスタンスを取ることが大切である。おおむね取組については高評価を得ている。 <p>第 3 回（2 月 22 日）【学校経営計画（最終評価）について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、保育・授業での子どもの反応やテーマを決めた報告（例えば「安全に関する取り組みの学習」）を要望。子どもの成長を見たいし理解したい。 ・研究授業 35 回はすごいと思う。保護者の満足度は 87 パーセントであるが、心理士としては 100 パーセント達成というのは懐疑的である。8 割 9 割の達成で十分であると思う。支援相談件数の減は、一度相談したケースはすぐに相談するという事は少ないので、件数だけの評価より「相談が役に立ったかどうか」という観点が必要である。内容や実績が大切である。 ・教員の手話力は向上していると感じる。授業中の手話研修は全国的にみても数校しかないが、教科指導ができる力も育成してほしい。

府立中央聴覚支援学校

3 本年度の取組内容及び自己評価 ※ 最終評価基準 (◎) 目標を上回って達成した。 (○) 目標どおりに達成した。 (△) 取り組んだが目標を達成できなかった。 (×) ほとんど取り組めず目標も達成できなかった。

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 安全で安心して学べる学校づくりを進める。	(1) 関係機関等と連携し安全に対する意識変革を行い、子どもが危機に対し自ら回避できる能力を育む。 (2) 安全な社会づくりに貢献できるよう、ボランティア活動等に取り組み、様々な対応力を育む。	(1) SPS 認証校として一層推進できるよう、専門家等からの助言を受け、より効果的な避難訓練(火事、地震、津波)を実施し、意識と行動の変革を行う。生徒に訓練を1学期に企画させ、2学期に実施する。 (2) 「自然・環境づくり」、「まちづくり」等のボランティア・グループを1学期に立ち上げる。趣旨に沿った活動を通して、社会貢献等を行う。	(1) ア 子ども等へのアンケートを実施し「安全に対する意識や行動が向上した」との回答率を100%とする。 イ 年15回の訓練の実施。 (2) 各グループで児童生徒の自己診断を3学期に行う。内容は「ボランティアとして役割を十分に果たせた」という活動満足度を100%とする。	(1) ア アンケート結果について、回答率は85%(△) イ 12月末で27回の訓練を実施している。実際の各種災害に対応する訓練が実施できた。(◎) (2) ・校外の清掃活動を積極的に行えた。児童会・生徒会が連携協力し、センターラインのシールを貼り、ポスターなどの作成など行い、また校内の危険箇所の点検も実施。活動のまとめを3月に校長に報告。 ・「ボランティアとして役割を十分に果たし学ぶことができた」というアンケート回答率は、73%(△)
2 教職員が必要な知識の習得と技能の向上を図り、個々の教育的ニーズに対応する。	(1) 「個別の教育支援計画」等の一層の活用を図るとともに、一貫したキャリア教育を行い、適切に進路選択に取り組む。 (2) 多様な課題について研究し専門性の向上を図ることで、子どもたちが変革する社会で生き抜く力を育くむ。	(1) ア 各学部で学力向上や体力向上等にかかる実態把握の方法を検討し、必要に応じて発達検査、学習に関する検査(読み書き、計算)を実施するために、専門家からの助言や先進的な取組実践校への視察など、指導力を向上させる。 イ 様々な進路選択ができるよう、発達段階に応じたキャリア教育に取り組み、各種検定等合格者を増やす。 ウ 大学体験等を積極的に取り組み、進路先を拡充する。 (2) 聴覚障がい等に係る合理的配慮の具体例を検討するために、これまでの聾教育の功績の振り返りと組織改編とともに会議の効率化を図って、より効果的な研修会等の実施、ICT機器の活用など、多様なニーズに即した指導ができるよう指導力の向上を図る。	(1) ア 左記を踏まえ全校で30回の研究授業を実施する。授業に対して、3学期の「保護者アンケート」で満足したとの回答率を100%とする。 イ 児童・生徒の各種検定合格者を延べ40%増にする。 ウ 大学等と連携し2校から指定校推薦枠等を獲得する。 (2) 具体例をまとめ校内で共通理解を図る。教職員の障がい理解について「前年度より理解が深まった」との回答率を100%とする。	(1) ア 研究授業35回実施。「保護者アンケート」の満足度87%。(○) イ 小学部:漢字検定合格率100%。中学部:英語検定合格率100%。漢字検定は83%。高等部:漢字検定25%、情報処理表計算検定は100%、日本語ワープロ検定83%、珠算電卓検定は100%、プレゼンテーション作成検定100%の合格率であった。前年度の延べ合格者数は50人であり、今年度の合格者数は延べ30人。前年度比40%減である。(△) ウ 高大接続ポータルサイトeportfolioに関しての取り組みを始めた。「大学入試英語成績提供システム」の概要について高等部の英語科に連絡した。指定校推薦枠を1校から獲得。(△) (2) 8月に研修会を行った。また、2月に第2回校内研究会を実施した。8月の研修会のアンケートでは「理解が深まった」という回答率は91%であった。(△)

府立中央聴覚支援学校

<p>3 地域の学校園とつながりを深め、センター的機能を充実する。</p>	<p>(1) 地域の学校園からの聴覚障がいに関する多様な相談に対し、適切な支援を行う。</p> <p>(2) 地域の学校園等と連携し、在籍する児童生徒の指導方法及び就学前の子どもへの支援の充実を図る。</p>	<p>(1) 他都市教育委員会等と連携し地域の学校園の指導力が向上するよう、積極的に相談に応じ、また聴覚障がい担当教員や養護教諭等を対象に研修会を実施し、障がい理解啓発を図る。</p> <p>(2) 関係機関や関係校等と連携し地域支援に関する情報をより発信し、障がい理解を促進する。</p>	<p>(1) 前年度比の相談総数を 30%増をめざし、また研修会等を年2回以上実施する。相談校教員にアンケートを実施し、「ニーズに応じた相談ができた」との回答率を 100%とする。</p> <p>(2) 情報紙を最低月1回、年間14回以上発信し、配付校等へのアンケートにより満足度 100%めざす。</p>	<p>(1) ・578 件（3月末現在）の支援を実施。（昨年度同現在 612 件） ・研修会を3回実施 養護教諭セミナー （41名参加） 聴覚障がいのある幼児児童生徒の担当教員研修会 （28名参加） みみネットアカデミー （15名参加） ・研修会（9校）、理解授業支援（4校）、支援学級相談（32校）実施校にアンケートを実施。「支援内容は要望に添うものだった」と回答した学校が 100%だった。（○）</p> <p>(2) ・「みみネット」を地域の学校園に配信。「みみより情報」を校内の保護者に年間11回配付。 ・支援学級相談生の在籍校（32校）、通級生の在籍校（9校）、支援学校（8校）に「みみネット」についてのアンケートを実施。「読んでいる」という回答が92%、満足度は100%。 校内の教職員に「みみより情報」についてのアンケートを実施。「読んでいる」という回答が97%、満足度は100%だった。（○）</p>
---------------------------------------	--	---	---	--